四百三十年の時を経て甦る天草本『おじゃる言葉のイソップ物語』

― 長崎・天草潜伏キリシタン文化遺産、今年、世界遺産登録に勧告！

天草コレジオ館にて、講演会を終えて ―

加藤 睦子

長崎・天草地方キリシタン関連遺産が今年五月四日、イコモスから、世界文化遺産の一覧表に登録記載の勧告が発表され、六月、正式に世界文化遺産登録が発表された。日本中に喜びのニュースが流れ、感慨深い想いで今、筆を執っている。

二〇一七年、海鳥社より出版した『かとうむつこ絵本・いそっぽの物語＝おじゃる言葉のイソップ物語』の講演会を、日本へ帰国するたびに開催して頂いている。その講演会に参加していた方の口添えがきっかけとなり、一年後の2018年、四月十五日、天草コレジオ館にて講演会を開催して頂いたことは、私にとり記念すべき日となった。

「長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産、教会群やキリシタン文化を世界遺産に」という運動は、約二十年前より長崎・島原・天草の有志の熱い志によって推進され、いよいよ今年、世界文化遺産登録かという時期に、天草町づくり協議会・河浦地区公民館・天草コレジオ館共催で『おじゃる言葉のイソップ物語・講演会』を開催していただいたことは、私も戦国時代の先祖のキリスト教信仰と、「天草本・イソップ物語」のことを二十年をかけてリサーチし、小説と絵本にして出版してきたことであり、私にも共時性が起きていたと感じて、喜びと感動の一日となった。

天草コレジオ館に大勢の方たちがお集まりくださり、講演前には、ルネッサンス期の衣装を着てのリュート演奏が行われた。柔らかく温かく美しい音色は、これからお話しと読み聞かせをする『おじゃる言葉のイソップ物語』の序章として最高の演出を準備してくださり、それは四百三十年前にタイムスリップするかのような感激であった。天草に住まう方たちが「コレジオの仲間」を結成し、ルネッサンス期の古楽器を演奏し伝えようと頑張っておられることも、感動である。

なぜ、天草河浦町に、キリシタン文化と西洋文化が、今にも伝承されているのだろうか？天草コレジョ館に、なぜグーテンベルク印刷機と「おじゃる言葉のイソップ物語』が？これより、そのことについて紙面を割いてお話しできることは、大変な喜びである。

先回書かせていただいたことに少し重複するが、四百三十年前、豊臣秀吉が禁教令を発令した後、キリシタン大名小西行長領・宇土・天草では、密かに、しかし大胆に、キリスト教の教会、九年制の大学（Collegio）、修錬院や美術・音楽学校が、島原・加津佐から続々と移築建設された。三十にも及ぶ教会と六十名ものパードレやイルマンを中心に、小西行長の家臣たち、かつての八木城主・内藤ジョアン、日比谷了珪の一族、結城弥平次、伊丹城主一族・加藤又左衛門重徳など畿内からのキリシタン武士たちが集結していた。これより、天草河内浦に素晴らしいルネッサンス文明を伝える最新の教育機関が十年間も展開されていったのである。

（南蛮船・ナウ）

天草にそれをもたらしたのは、日本をこよなく愛した宣教師たちと、その思想と活動を受け入れた人々であった。

豊後大友宗麟の元で活躍した有名な多彩な顔を持つ宣教師ルイス・アルメイダが、1566年より天草に入港し、1583年、天草全域の責任者として河内浦で人々に愛され亡くなる。その後、イエズス会・アジア全域巡察師のアレッサンドロ・バリアーノの発案が始まりとなって、天草にこれだけの文化をもたらすこととなった。

イタリア貴族出身のバリアーノは、遣欧少年使節団を結成して、イタリアで、ルネッサンスが最大限に花開いていた文化文明を体感し、ヨーロッパ各地の見聞と学問を治め、ローマ教皇や王侯貴族への謁見を企画し、一人でも多くの日本人に世界を識らしめ、又、民族的にも文化的にも優れた日本の存在を、世界にも識らしめたいと願った人である。

天正年間、信長の庇護のもとに日本を出発した十二、三歳の少年たちは、ヨーロッパ各地で大歓迎を受けながら、ラテン語、イタリア語、ポルトガル語、キリスト教、哲学、天文学、政治学、経済学、数学、地質学、建築学、航海術、出版印刷術、服飾、音楽、美術、ありとあらゆる西欧文化・文明の数々、勿論、地球は丸いことも学んで、八年の歳月をかけて、少年たちは、二十一、二歳の才能豊かな、すがすがしく逞しい青年に成長して、日本へ戻って来たのである。

しかし時は、信長が本能寺に滅び、豊臣秀吉が天下人として権勢をふるい、キリシタン禁教令を発令、バリアーノ率いる南蛮船を、受け入れることはなかった。

バリアーノの、数回の画策により、ようやく秀吉は、絢爛豪華に桃山文化を花開かせた京都・聚楽第に青年たちを迎え入れ、斬新なデザインの衣装を身に着けた四人の青年が奏でる音楽、デスカン・デ・プレの曲を「素晴らしい」と大変気に入り「もう一度、もう一度、聴かせてくれ」と喜んで、三回も聴いたという。並みいる家臣や政所・寧々や奥方たちも、異国の美しい音色に心を動かされたことであろう。

その場面を、宣教師ルイス・フロイスが、詳しく伝えた記録が遺されている。このパードレも日本をこよなく愛した人で、その文才、表現力の豊かさに文学青年として後に「日本史」と位置付けられる膨大な、日本滞在紀録を遺した人である。

フロイスの記録は、戦国のスーパースターたちの日常を物語って興味深い。

中肉中背の信長の声が、甲高いこと、その当時の服装、家臣たちが神経質な信長を恐れピリピリと走り回る様子。大坂城での秀吉の華美な生活や女たちの様子。軍艦奉行であった黒田官兵衛が超多忙のため高山右近と内藤ジョアン二人を自分の軍船に乗せて生活を共にし、キリスト教の教えを学んでいること、その息子長政のこと。他の武将たちのその日常までも詳しく伝えていて、当時の人物像が生き生きと甦るほど面白い。京都や奈良の寺々の庭の表現も、今に少しも変わらず美しい文章で顕わしていて、外国人の目で見た戦国時代の一級の文献である。

秀吉は、文禄の役を発令した直後であった。ローマ帰りの四人の青年に、京都や奈良の寺院を見学させた後に、「我が国には神道や仏教があるから、キリスト教は受け入れない。ヨーロッパへ戻りなさい」と言い、青年たちを受け入れることはしなかったのである。

その南蛮船には、西洋文化の宝物が、山のように積まれていた。その大船ナウを、引き受けたのは、肥州・宇土城二十四万石の領主として宇土・天草を治めていた秀吉の軍艦奉行・小西アゴスティーニョ行長であった。宝の山を搭載した大船ナウが、密かに天草河内村（現河浦町）に入港したその日から、続々とその場に世界の文化文明が展開されていくのである。

バリアーノ率いる遣欧使節団が持ち帰った西洋の文化文明の数々。世界に爆発的な文化文明の華を開かせたルネッサンス期の豪華な衣装や家具、絵画、リュート、リコーダ、ヴィオラ、ヴァージナル、ガンバなどの楽器がもたらされ、天草志岐では、イタリア人、ジョバンニ・ニコラオの工房（美術学校）で、油絵による数々の聖画や屏風絵、聖像、ロザリオ、メダイの制作、賛美歌合唱用のオルガンや時計、日本の竹で作られたパイプオルガンなどの製作、そして、天草学林と呼ばれるコレジョ（9年生の大学）神学校・セミナリオ、修練院などなどの、日本初の素晴らしい教育機関が、天草に展開されていくのである。

（グーテンベルク印刷機）

特筆すべきは、天正遣欧使節団の帰国船には、ドイツで発明されたグーテンベルク銅版活版印刷機が乗っていたことである。1592年より、五年間で二十九冊ものキリシタンの書籍が天草河内（現河浦町）で発行された。これらは「キリシタン・天草本」と呼ばれ、貴重な資料となっている。その中の一冊『平家物語・ESOPONO FABVLAS・金句集』との出逢いが、この『かとうむつこ絵本・いそっぽの物語』としてさし絵を描き、四百年の時を超えて、絵本と

して世に送り出す縁となった。現在、天草コレジオ館には、それらの文化文明の数々が再現され、興味深い展示となって、観光客を楽しませている。

「天草本・ESOPONO　FABVLAS」はその後、「伊曾保物語（いそぽのものがたり）」として、日本語に版刻（はんこく）され、ついには、万治年間(1658～1660年)、御西天皇治世には「万治（まんじ）絵本・伊曾保物語」が、浮世絵師の絵入りで、京都で出版され大いにもてはやされていく。後西天皇は、『水日集』などの歌集を多数残し、和歌の才、古典への理解も深かったという。天皇も「伊曾保物語」の発刊を推進援助し、手に取って楽しんだ一人ではないかと想像している。この時代の人々もこの「イソップ物語」を通して、ヨーロッパ、ギリシャ、バビロニア、エジプトなどの世界の地名に触れていたことにも、感動を覚える。

余談になるが、赤穂浪士の討ち入りの記録の中に、後西天皇と主人の先祖・伊丹（加藤）家との興味深い関連話を見つけたので、ここに、ご紹介したい。

後西天皇の母方の曾祖父は、信長に滅ぼされた、かつての北摂伊丹城主・伊丹親興意遁であり、その姉が「天草本・ESOPONO　FABVLAS・いそっぽの物語」の和訳に携わった寶樹院様である。後西天皇の画像は、確かに天皇家には珍しくあごの張った武ばった、かっぷくの良

（後西天皇画像）

（伊丹親興画像）

い体格で描かれており、曾祖父・伊丹親興も、武ばったそっくりの顔の輪郭の画像が遺されていて面白い。ちなみに伊丹親興は蹴鞠の名手であったことが、天皇家の外曾祖父となる運命に繋がっていたようである。

後西天皇の従弟には、伊達藩三代目の綱宗がいた。後西天皇の母・蓬春門院の妹・櫛笥貝姫が、綱宗の母である。このように天皇の母方が武士の出自であることを理由に、吉良上野介は、天皇の退位を画策しており、この時期、後水尾上皇とその皇子であった御西天皇とその側近の公家衆を悩ませていたという。

赤穂浪士討ち入りの背景に、様々な記録から、天皇家は、吉良上野介を警戒しており、近衛基熙と東山天皇は、大石内蔵助の上野介討ち入りをかなり積極的に容認し、支持し、後援したという説がある。赤穂浪士に吉良上野介が打たれたとき、天皇家の皆が、胸をなでおろした、という後日談が遺されている。

講演で、私は、次のような話を織り交ぜてお話した。「四百三十年前、主人の先祖・加藤家は、小西行長の家老であり、天草本・イソップ物語の和訳編纂に関わっていると検証し確証を得たこと。戦国歴史小説「急ぎ御文参らせ候・寶樹院殿・悲話哀話」と「絵本・いそっぽの物語」には、そのことを描いて出版したこと」「先祖は、自分たちが経験した信長と秀吉への反抗心、体験物語、滅びし人々への哀悼の想いなどを、家老という権力をもってこのイソップ物語に反映させようとし、創作し、上手に織り込んだのではないか？」と。そして、その創作されたと検証したいくつかの物語の読み聞かせも行い、先祖が生きたご縁のあるこの場で講演ができたことを、稀有なる出来事として感謝した。

もう一つ、天草町づくり協議会・河浦地区公民館・天草コレジオ館共催の、その協議会にも、主人共々招いていただいたこと、これも有難く稀有なる出来事と感じている。

その協議会の場で「なぜ当時、キリスト教がそこまで広がったと思われるかと、観光客から質問を受けるが、どのように答えればよいか？」という質問を受けた。

一言でそれを語ることはできないが、私は、天草四郎が、原城に二か月籠城した戦いのさなかに、幕府軍へ飛ばした矢文の中に、キリスト教がそこまで広がった大きな理由の一つがあることが、とっさに思い浮かび、お話しした。

天草四郎の矢文には『天地同根万物一体。一切衆生は貴賤を問わず平等である。その信仰のために戦っている』という一節があった。その矢文に象徴されるキリスト教の思想・精神は、自由平等の衆生の人権を説いていたことに驚かされたのである。

それはまるで「黒人解放・公民権運動」の、キング牧師の言葉と同根同義ではないかと、天草四郎がこの時代に明確な人権を主張していたことに驚愕した。権力者秀吉、支配者、特に「士農工商」の身分制度を打ち出した徳川幕府にとっては、都合の悪い極みの思想、真逆の思想は、徹底してキリスト教を弾圧せざるを得ないわけが、はっきりと現れているではないか。それは 2,000 年前の、ローマでのキリスト教迫害と同じこと、徳川時代の「島原・天草四郎の乱」は、人権との戦いであったのではと思える。なぜ、人類は、人権を巡って繰り返し戦わねばならないのか？切ない哀悼の想い、鎮魂の想いが一気に湧きあがってきた。

もう一つは、「宣教師たちの苦難の中での愛の実践こそが共感を生んで、広がっていった」ことが思い浮かび、お話した。

応仁の乱以来、戦乱が果てしなく続く戦国時代に、波頭を超えてやってきた宣教師たちは、始まりは石や汚物を投げられ、こん棒で殴る者までいる苦難の始まりであったと記録されている。

彼らがどの地へ赴いても命を懸けて伝え行ったのは、まず、すべて無料の孤児院（子部屋）、病院、施薬院を創り招き入れ、食事を振舞い、料理を教え、左のほほを打たれれば右のほほを差し出しなさいという無償の愛を生きた、愛の実践者たちであったのだ。

この生き様に感応した人々の口から口へと、広がっていったのだとイメージした。それは、燎原の火のように、ガンジーの「非暴力主義」のように、どの時代にどの国に生まれようと、大切なものに感応する、人間、人類共通の、普遍的精神だと思える。

「おじゃる言葉のイソップ物語」も、その普遍的精神性に貫かれていたから、武士道に影響を与え、もてはやされたのではないか。

長崎・天草には潜伏キリシタンとして、形だけでなく、その精神を捨てることが無かった人々によって伝承されていたことが今、時を超えて人々の心に音叉のように響き合い、世界文化遺産登録へと、つながったのだと感じられる。

天草から発信された『おじゃる言葉のイソップ物語』を読み込めば読み込むほど、武士道に影響を与えていたわけと、その深さに気づかされ、ひとしおの驚嘆を覚えている。

武士たちも、きっと「ほっほお、これは痛快じゃわい」「権力者に物申すいさぎよさ、面白い！」「武士たるもの、かくありなん、この精神こそ武士じゃ」と、やんやと手を打ち鳴らし、膝打ち鳴らして共感したことであろう。

こうして江戸時代を通じて、九冊の「伊曾保物語」と転用した書物が数多く出版され、「教訓の書」として語り継がれ、子弟を育て、もてはやされたことに大変な興味と同時に、また疑問が募る。

キリシタン弾圧が徹底した徳川時代にキリシタン本「伊曾保物語」は、なぜ、生き続けることができたのであろうか？誰がどのように伝承していったのであろうか？

また一つ、興味深いテーマを見つけたことになった。

天草コレジオ館での講演の最後に、思わぬ出来事がもう一つあった。

主人のシオーと私を、壇上にあげて下さり、主人も紹介してくださったのである。温かい皆さまの歓迎に、その時、不思議な感覚に浸っていた。「おじゃる言葉のイソップ物語」をこの世に表した先祖たち、パードレ、小西行長、人々も共に喜んでいるのではないか、いや、あるいは、自分もこの場に生きていたのではないか、ここに集った皆さんも、この場に生きていた人々では？という、時空を超えた、温かく安らいだ歓びに満ちた不思議な感覚であった。

四百三十年の時を超えて甦った『絵本・いそっぽの物語』を通して、これからも、少しでものお役に立てたら嬉しいと思う。

宣教師たちが伝えた人間の尊厳、自由平等、愛の思想が日本で発信され、その思想に感応した武将たち、家臣たち、衆生、女性たち。実は戦国時代に、すごいことが日本全国にも起きていたのだと、改めて考えを深くする新たな発見の場が、天草コレジオ館であったことは、因縁を感じると共に、嬉しい限りである。

あまたの苦難を体験した大義を生きた人々への、鎮魂のいのりと共に、感謝と、讃歌とを持って、長崎・天草地方キリシタン文化遺産が、世界文化遺産登録になることを、心からお祝い申し上げたい。

獅子と、狐のこと

獅子もってのほかに　**あい傾ぉて**　さんざんの体であったれば、万のけだもの　それを問い訪むろぉこと暇も無かった。そのうちに　**きつね**ばかり見いぇなんだ。ここにおいて**獅子**、**きつね**のもといぇ　消息して　言いやるわ。　502

何とてそれにわ　見いぇられぬぞ？　常の衆わ　多分見舞わるる中にあまり　**うとうとしゅう**訪っずれもないわ　極も無い次第ぢゃ。生得　それと我とわ　深切の仲なれば、逆心　あろぉずる儀でない。もしまた　身が上を疑わるるか？　少しも別心わ無い。たとい　害をなしとぉても　今　この体でわ叶わねば、**お出でを待ち存ずる**　と

書いたところで、**きつね**

謹んで、仰しぇかたじけのお存ずる。さほどのことも存じぇいで　この頃わ　無音本意を　背いてござる。只今も　参りとお存ずれども、**ここに一つの不審がござる。**

よろっずのけだものの　**お見舞いに　参られたとわ　おぼしゅうて、御座所**いぇ入った　足跡わあれども、出た足跡わ　一つも見いぇねば、おぼつかのぉ存ずる　と　返事した。

＜　したごころ　＞

言葉の口跡に　違ぉ時わ、人が　これを信じぇぬもの　ぢゃ。

FINIS. おわり